

住民の暮らしの知恵に学び、広め、広がる

豊かさを広げる 地域づくり

令和5年度 沖縄県生活支援体制整備事業ガイドブック



1-4 「地域のお宝」と生活支援体制整備事業

5-6 介護サービスを利用しながら大好きなグラウンドゴルフを続ける(北谷町)

7-8 「買い物?困っていないよ。だってみんなが助けてくれるからね」(名護市)

9-10 豊かなつながりが地域をはぐくむ

11 「地域のお宝」の見える化・意味づけ・意識化をとおして支え合いの基盤づくり

「地域のお宝」と生活支援体制整備事業

生活支援体制整備事業とは？

家族で介護を担うことの限界から、「介護の社会化」を目指し、介護保険制度が成立したのは2000年のこと。介護保険制度のサービスは充実しましたが、少子高齢化や人口減少がもたらしたものは、地域の支え合いの弱体化のみならず、単身化や地域のつながりの減少による社会的孤立の増加でした。

高齢になっても住み慣れた地域で暮らし続けるために、制度やサービスだけでなく、医療、介護、保健、福祉、住まい、生活支援、介護予防が身近な地域で連携し、支え合いや助け合う地域包括ケアシステムの構築が重視されています。

2015年の介護保険制度の改正で、生活支援体制整備事業が盛り込まれました。この事業では、支え合う地域づくりを目標に、多様な主体による多様な取り組みをコーディネートする「生活支援」

コーディネーター（地域支え合い推進員）の配置と、必要な仕組みを地域にあったやり方で考え、運営していくための話し合いの場「協議体」の設置が求められています。

地域づくりの主役は住民です。生活支援コーディネーターや協議体は、住民、専門職との協働を推進し、支え合うこれからの地域づくりを進めていくのです。

「地域のお宝」と「ナチュラな資源」とは？

私たちの日常には、さまざまな「社会資源」があります。社会資源の概念には、人、サービス、情報、空間、財源、制度、ネットワークなどが挙げられますが、それらは公的なもの、制度化されたものである「フォーマルな社会資源」と、公的な整備をされていない制度外の「インフォーマルな社会資源」にしばしば分類されます。

値に気づいていない場合が多いのです。この「ナチュラな社会資源」の意味やたいせつさは、地域づくりの根幹ともいえるものです。

「ナチュラな社会資源」と言える根をしっかりと張り、広がることで、「インフォーマルな社会資源」の幹が育ちます。「幹」である自治会や町内会の活動などが活発になることは、「根っこ」にある日常の人間関係を豊かにし、また、「根っこ」のつながりが強くなることで「幹」の活動が活性化されるなど、還流する関係のなかにあります。

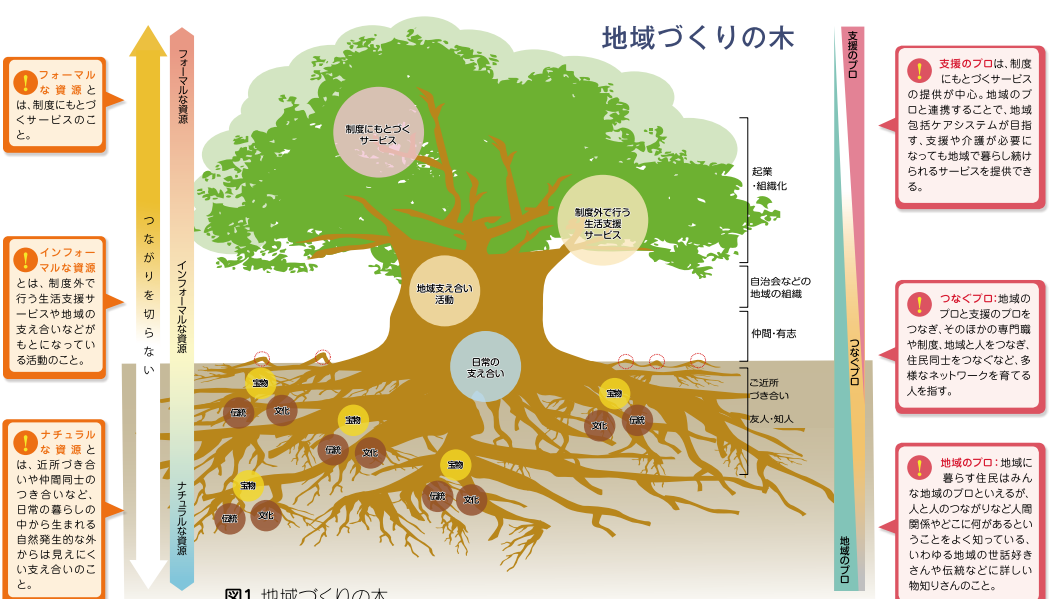


図1 地域づくりの木

生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）は「根っこ」にある日常の関係性のなかから見えてくるつながりや支え合いに着目し、日々地域に向かい、住民との関係がはぐくまれ、いろいろな出会いをしていきます。気になる人や地域の課題を対話のなか

から把握し、本人や家族、そして専門職ともつながり、地域での暮らしに寄り添います。一方で、豊かな地域づくりに向けて、そうした暮らし方を地域の協議体や公民館長、民生委員、住民と見える化、見せる化しながら共有し、地域に広めていくことが、地域づくりにたいせつなことです。

この「ナチュラな社会資源」は、暮らしのなかではあまりにも自然に行われており、住民自身も当たり前のこと、「特別なことはしていない」、あるいは「自分の近所だからできる。よそではできない」といった声が聞かれるほど、日常の暮らしのなかに埋もれています。「近所づきあい」「友だち関係」あるいは「地域の風土・風習」などに代表されるこれらのいとなみは、住民も専門職もその大きな価値

インフォーマルとナチュラな社会資源 2

竹富島の祭り「ミニミニミニ」

「竹富島には、一致協力するという意味の『つつぐみ』という心が根づいています。島の主産業が農業だった昔に、手伝い合つ名残が、主産業が観光となった現在でも受け継がれています」と話すのは、竹富公民館長の新田長男さん。

その象徴であるのが、祭り。「祭りがあがるからいそ、ミニミニミニ」が保てると語り、年々、年々とおして祭りや伝統行事がさかんです。祭りは、0歳でも100歳を超えていても、島民誰もが役割を持っています。島民ごとく、「この日のために元気がいなくては」という心の支えにもなっているのです。

インフォーマルとナチュラな社会資源 1

田井等区老人会の友愛訪問と日常のつながり

名護市

47年前、「病気で寝込んでいた人のお見舞いをしよう」と始まった、年に1回の友愛訪問は、田井等区老人会を中心とした活動の1つです」と話すのは、元老人会長であり、この活動の継承に尽力してきた東江重正さん。現在は、おおよそ88歳以上の高齢者約40人を対象に老人会と自治会役員が訪問しています。「コロナ禍の前は、市外の入所施設に転居した人も訪ね、地区の思い出話に花を咲かせていました。途中の高齢者宅ではゆんたくを楽しみ、「自分一人では行けないけれど〇〇さんに会いたいわ」という声があれば、その人の家にも一緒に訪問しています。



友愛訪問活動の様子

「顔を見て、元気の確認をしたい」と話すのは、会長の金城邦弘さん。地区のミニミニも、「コロナで中止要請が出ていた期間以外はずっと開催していましたよ。誰かに会いたい」「家に閉じこもってばかりいると体調が悪くなる」という声はよく聞かれています」と地区書記の上間恵さん。日常的に元気の確認をするのももちろん、年1回の友愛訪問活動を大事に続けています。

田井等区では自治会や老人会が主催となり、ミニミニやグラウンドゴルフ、世代間交流行事、花見会や運動会などさまざまなイベントを実施しています。また、年間17回の御願も地域の大事な行事のひとつです。「5回ほどは、隣の親川公民館と合同で御願を行っている」(区長・古我知司さん)そう。当日を迎えるまでの準備や、観月会では多くの住民の参加もあり、こうした風習を受け継ぐことが、日常的なつながりの強さにもつながっています。



みんなで記念撮影

御願の意味や準備物などが手書きでまとめられている

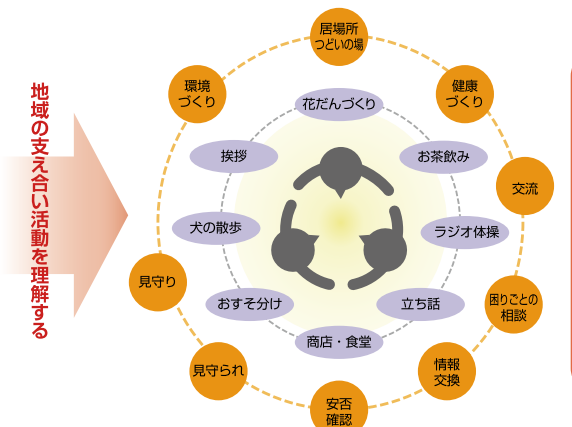
地域に混ぜてもらって見える」と

地域のいとなみに混ぜてもらって、「日常の交流にさまざまな意味があることがわかります。図2「日頃の交流を意識化」は「日常に当たり前に存在する住民のいとなみの一例」と、そこから想定されるさまざまな支え合いに資する意味を図式化したものです。

たとえば「花壇づくり」の場合、誰かと一緒に花壇づくりをしていれば、それがその人たちにとっての「通じの場」。そこに来ることが「健康づくり」にもなり、おしゃべりをしながら「交流」すれば、「情報交換」も「困りごと」の相談などもなされていきます。お互いの「安否確認」や「見守り」も、お互いの「安否確認」や「見守り」も周囲の人が気にかけていることを周囲の人が気にかけていなければ「見守られ」にもつながっていません。日常の暮らしには、そうした意味がふんだんに含まれており、それを住民と一緒に意識することが、関係を続けていくことのために、さらには再確認することができ、地域づくりにおいても重要な視点です。

地域の「お祭り」や「伝統行事」は、住民であれば誰もが参加できる地域のいとなみです。積極的に参加し、

地域の支え合い活動



地域の支え合い活動を理解する

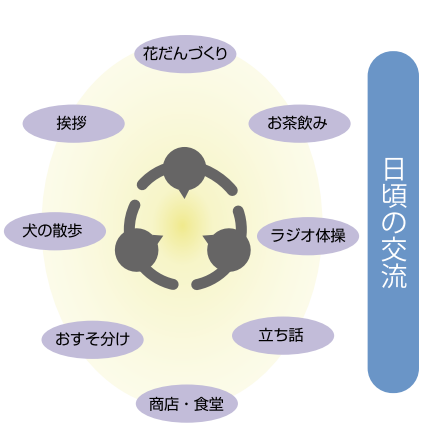


図2 日頃の交流を意識化

盛り上げるだけでなく、家の窓から祭りの様子を覗いている姿を確認することも安否確認につながります。また、こうした行事を続けるために、つちかつてきた関係性、続けて

いく誇り・プライドやそのための思いやりなどが、地域の結束をより強くしていることは言うまでもありません。そうした住民のいとなみに混ぜてもらうためには、住民が大事にはぐくんできた地域の流儀をたいせつにしなくてはなりません。住民感情をないがしろにした地域へのアプローチでは、関係性は築けません。まずは住民の話をつかりと聞き、思いを知り、場を共有することで地域の底力が見えてくるのです。専門職が住民の暮らしにかかわるのは、生活のなかのほんの一部にすぎません。そのなかで住民が何気なくしている支え合いが、地域の強みであり、地域の自慢になっていくのです。

生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）のネットワークづくり

生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）が地域づくりを進めていくためには、住民との関係だけでなく、専門職同士の関係の構築もたいせつなポイントです。

生活支援コーディネーターの業

務には、地域に出向き、地域の声を実際に聞き、そしてそれを職場内外で共有するという一連の過程があります。チームでぶれない信念や活動の目標を見据えるために、日頃から行動をともしたり、情報共有の場づくりを積極的に果たさなければなりません。さらに、行政、地域包括支援センター、社会福祉協議会などの組織、地域ケア会議などの多職種が一堂に会する場もありますし、それらに属したり参加したりするコミュニティソーシャルワーカー、スクールソーシャルワーカー、地域おこし協力隊、集落支援員などの専門職がいます。それらの専門職と連携をしていくことは、さまざまな視点で地域を見ることにつながります。可能な限り複数で訪問し、それぞれが感じたことを話し合うことで、生活支援コーディネーター自身の視点がより広く深くなっていきます。このことは、豊かに地域づくりを進めていくためには非常に有効です。



地域に混ぜてもらって見える」

「ハーサロン」でのゆんたく

宜野湾市

「ハーサロン」の店主、伊藤吉三さんは77歳。宜野湾市内で理髪店を営み、理髪師となつて50年以上の大ベテランです。「昔は、ハーサロンが地域の情報交換の場だった。『〇〇ちゃんのおじいさんが畑で倒れた』とか、『〇〇さんのところのお嫁さんは△△から嫁いできた』とか、地域の社交の場でもあったんだよ」と語ります。そんな「ゆんたく」を大事にしたいと、伊藤さんはお客さんが来ると、お茶やコーヒーをサービス。にぎやかに声をかけながら、待ち時間も退屈しないようにと、店内には新聞記事やポスター、観葉植物などが所狭しと飾られています。

創業当時から通っているなじみのお客さんもたくさんいます。「50年もたつと、いろいろな不便を抱えている人も少なくないのよ」と伊藤さん。ゆんたくで体力や認知機能の低下に気づくこともしばしばで、歩くことが難しい常連さんを迎えに行ったり、ヘッド上で散髪をするために自宅へ出張散髪することもあるそうです。ハーサロンでのゆんたくは、さまざまな暮らしの気にかけるつながるたいせつな場です。

地域に混ぜてもらって見える」

沖縄県独自の社会資源

沖縄県には、「ゆいまる」や「いちやりのばちや」の精神があり、日常の生活文化のなかにもさまざまな社会資源があります。

- ・ゆんたく（元祖「通じの場」）
- ・模合（気にかけて・支え合いのネットワーク）
- ・お祭り（本番＆準備やカジマヤーなどのお祝いの行事）地域の人が「つながる」場、「つなげる」場、次の世代に「つないでいく」場
- ・子ども部活支援などのカンパ
- ・公民館、自治会（地域のつながり・情報・支え合いの拠点）



ゆんたくをしながら互いの様子を知ろう（竹富町）



伊藤吉三さん

伊藤さんは、4つの模合に参加。同級生や、なかなか会えない親戚とも、模合をとおして定期的に顔を合わせる機会をつくっています。「模合は助け合いのシステムそのもの。いまはコミュニケーションの場だね。月に1回、お互いの元気を確認しているよ」。

情報共有のたいせつさ

うるま市

生活支援コーディネーターのネットワークづくり

うるま市は、1人の第1層に加え、7圏域で7人の第2層生活支援コーディネーターが市社会福祉協議会に配属されています。市社会福祉協議会で昨年度から重点的に取り組んでいるのが、生活支援コーディネーター同士の情報共有。「入職後、職務に慣れたころに一人で業務を任されるようになると、それが生活支援コーディネーターの孤立化につながってしまっていたんです」と第2層生活支援コーディネーターの松田貴子さん。そこで、毎朝のブチミーティングを開始。その日の業務予定や前日の報告など、顔を見て話をする機会を意図的につくり、全員で情報を共有するよう努めてきました。



第1・2層の生活支援コーディネーターの皆さん

集落支援員のつながり方

竹富町

生活支援コーディネーターのネットワークづくり

属 懐 也 さんは、2021年4月から、竹富島の集落支援員として活動しています。「竹富島は、本来の人間同士の助け合いが色濃く残っている地域です。近所の人ができない人の掃除を手伝っていたり、診療所に送迎をしたり、そんな姿がたくさんあります」と話します。属さんは、そうした人と人とのつながりを壊さないように暮らしを支えることを心がけています。「高いところの枝を切ってもらって」「船積み荷物が取りに行けないから手伝ってほしい」など、自分ができないことをする、すくにはできないことも一緒に考えています。島に移住して13年。顔と名前はみんな知っているよ」。